

2022

優秀作品集

小学生
区分

香川県知事賞



広がる思いやりの輪

三豊市立下高瀬小学校 五年

近石 ちかいし

咲 さく

香川県



中学生
区分

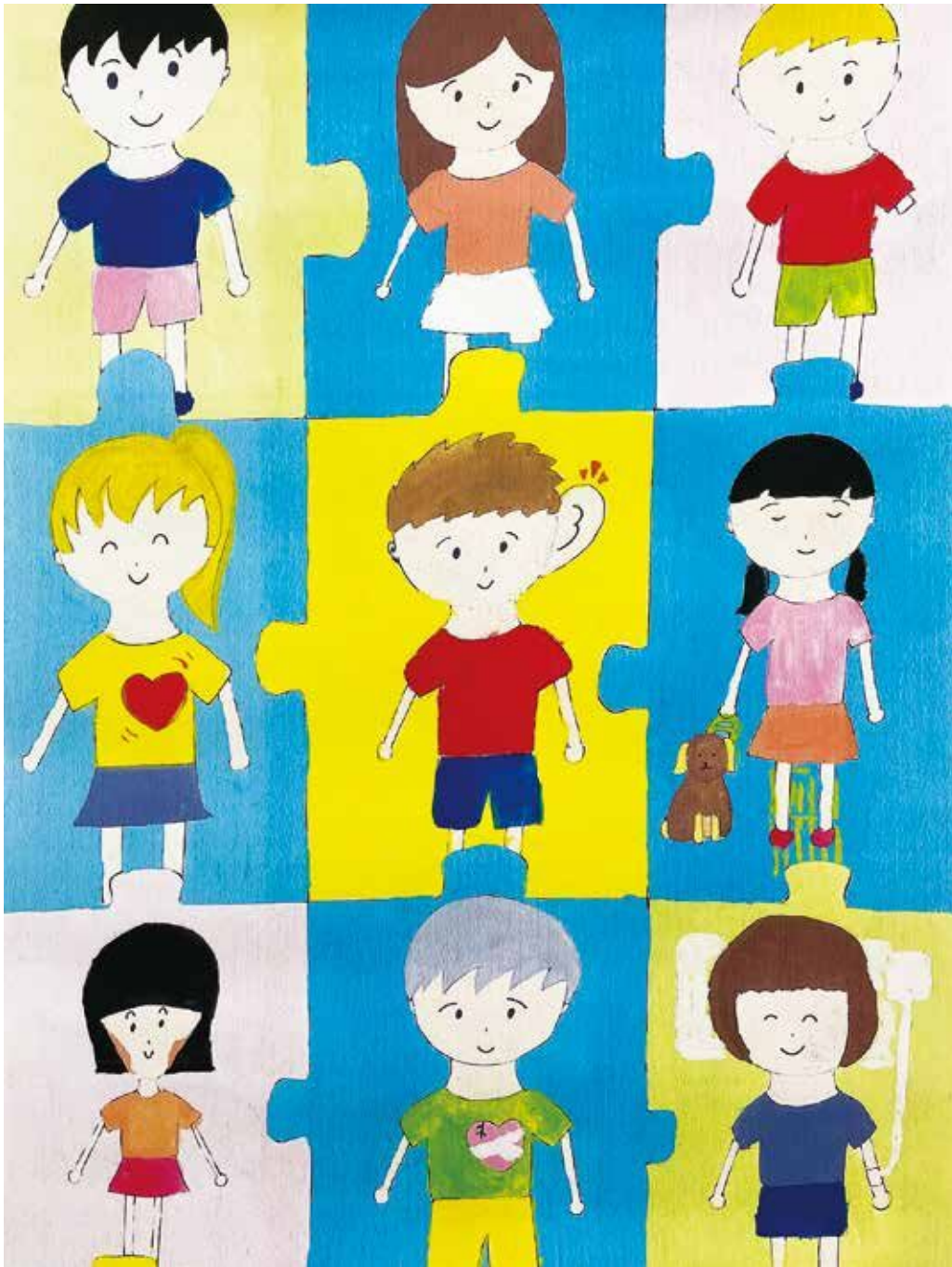
香川県知事賞

助け合いと理解の気持ちを大切に

高松市立龍雲中学校
二年

北川

結子



小学生
区分

香川県健康福祉部長賞

駐車場どろぼう

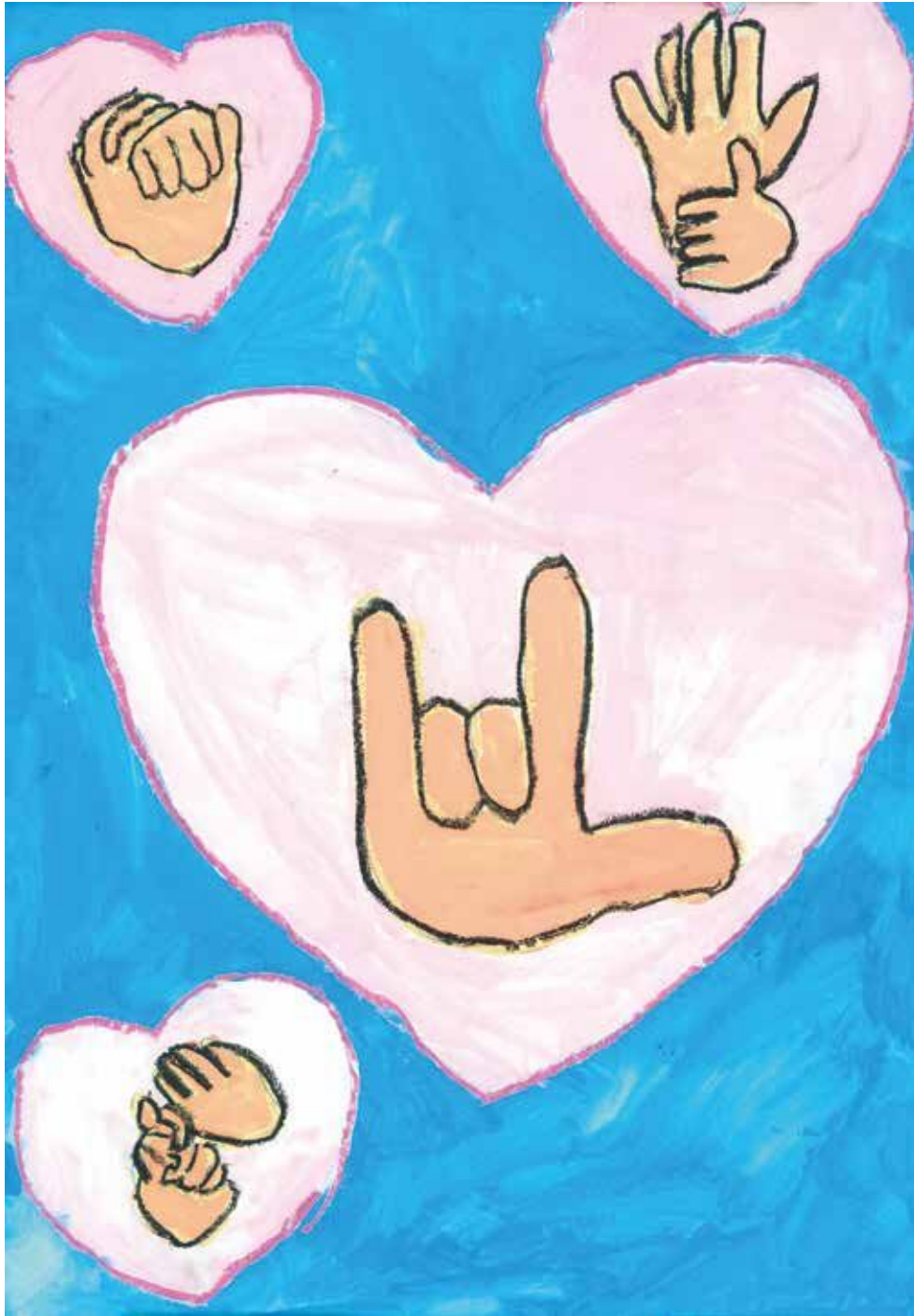


三木町立氷上小学校
五年

皆木^{みなぎ}

一徹^{いってつ}





思いやり



香川県健康福祉部長賞

三木町立氷上小学校 五年

三好

啓仁





中学生
区分

香川県健康福祉部長賞

私の願い天まで届け

綾川町立綾川中学校
一年

萱原 かやはら

由梨奈 ゆりな



支えあつて生きる



観音寺市立観音寺中学校 三年

東根 ひがしね

杏紗 あずさ



中学生
区分

審査員特別賞

羽ばたけ



観音寺市立観音寺中学校 三年

林 はやし
樹里 じゅり





かけがえのない相棒

「こんなにもドキドキして怖いと感じるのは、誰かのために頑張ろうとしてるから。大切な人に、喜んでもらいたいと頑張ってるから」母の言葉で、私はようやく自分の気持ちに気づけた。

私は今、九月に行われる香川県障がい者スポーツ大会に出場するため、日々練習を重ねている。出場する種目は、ビーンバック投げだ。ビーンバック投げというのは、重量百五十グラムの大豆が入った布袋を三球投げ、距離を競う競技だ。私は学生時代、毎年出場していた。私の経験上、出場する選手は車いすに乗っていて、下半身にだけ障がいを持った人が多い。だが、私は全身性障がいであり、付随運動がある。思った通りの動きができなかったり、時に自分の意志とは反する動きをしてしまう特性を持つものが付随運動だ。何メートルも投げる選手に対し、私の最高記録は、一メートル三十九。時には、足元に落としてしまい記録を残せなかった時もある。私にとって、物凄く不利な戦い。未知の挑戦。

私は社会人になったら、スポーツとは無関係だと思っていた。しかし、古希を迎えた、私の祖父は、現役で野球チームに所属している。祖父は歩く事はできるが、足に軽度の障がいを持っている。だから、香川県で唯一の障がい者野球チーム『香川チャレンジャーズ』に所属しているのだ。私はある日、祖父の野球練習の応援に行つたのだ。一人ひとり、違う障がいを持ち、年齢層の幅広い人達が練習していた。ワイワイとした雰囲気、練習が終わつても日が暮れるまで雑談を交わしている。そこはまるで、学生の部活動のようだった。私は、そんな雰囲気と心惹かれ、毎週土曜日の練習に足を運んだ。顔を合わせていく内に、私は皆と仲良くなれた。中でも、趣味嗜好が似ている、話しているとき共感する事が多く、何でも話せる人がいた。月日が流れたある練習の日、その人が私にボールを投げる振りを見せて、「これできる?」と尋ねた。私が頷くと、野球ボールを持ってきて、私の右手に握らせた。野球ボールに触れる事は、その日が初めてだった。思ったよりも軽く、私は一球投げてみた。そうすると、思ったよりも遠くへ投げる事ができたのだ。私は嬉しくて楽しくて、その日は何球投げたのだろう。ただ、自分一人ではボールを握る事が難しいため、握らせてもらわなければならなかった。スツと握れる時があれば、思うようにボールを握れない時もある。その人は「ゆっくりでええで。ゆっくりで」私にそう声かける。その言葉は、私にとって一番、心落ち着く言葉だった。その人は、片手に軽度の障がいを持っている。手を私に見せ、「同じやけん」と言う。私は、その言葉に、とても温かさを感じたのだ。次の練習の日には、野球ボールでは重いからと、軽いボールを、私のために買ってくれていた。その時、言葉に表せないほどの嬉しさが込み上げた。それからの日々、家でも遊び程度に投げていた。

そんなある日、私の職場でスポーツ大会の話をしている人がいた。私は不意に、大会に出場すると、思い立ったのだ。そして私は即、申し込書を役場に提出し、練習用の球を購入したのだ。あの日、野球ボールに触れなければ、私はこの大会に再び挑戦する事はなかっただろう。きっかけくれたあの人は私、いつしか相棒と呼ぶようになった。日々家でも練習をし、土曜日は野球練習を終えた皆が、私の練習に付き合ってくださるのだ。的があれば、私が投げやすいのではないかと的になってくれる人、アドバイスをくれる人、手に球を握らせてくれる相棒。「まだこの距離やで」と、私を煽る人もいる。それにより私は、更に意欲が湧くのだ。多くの人達が、私のために協力や応援してくれる。私は、その時間がとても楽しく、また皆の気持ちがとても嬉しかった。相棒は「教えたらできるから、つい無茶な事を言ってしまう。申し訳ない」と、私に言うのだ。だけど、それくらいが丁度いい。私のできる可能性が広がっていくのだから。だがその一方で、私は今までに感じた事のない、不安を感じていた。本番、緊張して思うように投げられなかったら。一人で抱えきれない時には、相棒に打ち明けた。頭の中を巡っていた。一人で抱えきれない時には、相棒に打ち明けた。相棒は、「大丈夫大丈夫。上手く投げられるイメージをしよう」「リラククスする練習をしよう」といつも、ポジティブな言葉をくれるのだ。

私は今まで、たくさんのお話を相棒から教わった。私が、精神的に落ち込んでいた時には、「何も無い時はツイてる」と思い、困った時はありがとうと思、良い事があればただ感謝する。」と、良い事も嫌な事も感謝に変えてみる。不安がなくなるといふ事を教えてくれた。それからの日々、忘れそうになる時もあるが、何事にも感謝する事を心がけている。嫌な事や悪い事が起きた時は、自分にとって本当に大切な事に気づかせてくれるメッセージだと思ふようにしている。

障がいを持って、困難に思える事は人一倍多くなるだろう。だけど、リハビリを重ねたからできるような事はない。もちろん達成するまでには、相当な苦労や苦痛を味わう。逃げ出したい時もある。だけど、達成した瞬間には、大きな幸福感に満たされる。だから、次も頑張ろうと思えるのだ。相棒は、不可能を可能にする事が好きだと、いつか私に話してくれた。私も好きだ。自分には不可能だと思ふ時もあるだろう。だが、少しでも興味を湧くのなら、挑戦してみる価値はある。

私は少しづつだが、ビーンバック投げの距離が伸びてきている。どんなに不利な戦いでも、決して不可能な戦いではない。距離が伸びれば、相棒はクシヤツと笑って喜んでくれる。そう、私はその顔が見たいんだ。



心の壁

私の母は介護士をしています。私も小学校のときはよくお手伝いに行っていました。母の働くデイケアセンターにはいろんな人がいました。目の見えない人、指が二本ない人、耳が聞こえない人。初めはすごく怖かったです。自分とは違う、どう接したらいいのかも分からないそんな状態でした。だから私は手伝いに行っても、自分とは違う人を避け話しやすい人とばかりしゃべっていました。でも、飲み物やおやつを配るときはどうしてもしゃべらないといけませんでした。どうしたらうまく伝えられるのかなんて分からないとばかり思っていました。しかし私のこの考えをはっきりと変えた出来事がありました。

ある日、目の見えない人の爪をケアしてほしいと母に頼まれました。爪のケアをするのは好きだけれど、目が見えない人とどう接すればいいんだと少しの間棒立ちになって考えました。でもやるしかないと思いました。いざ始めてみると「爪してくれるの？うれしいなあ。」

「ももちゃんの手先が器用なんやね。」

と言ってもらえました。すごくうれしくて心が温かくなりました。ケアが終わったあと、その方に話しかけられました。

「爪やってくれてありがとうね。おばあちゃんは目が見えないけどももちゃん心がこめてやってくれたのは分かるよ。ありがとうね。」

そう言ってもらえたとき心臓がキュツとなりました。自分はこういう気持ちでどんな態度で接してたんだろう、避けながら最低限の会話しかしてなかった自分は最低だと思いました。今までたくさんかわいがってくれていっぱい話をしてくれた方たちに申し訳ない気持ちでいっぱいでした。これからはもつ

とたくさんお手伝いに来てもつと関わろう、今度は絶対に避けたいと思いました。

それからは前よりもたくさん手伝いに行って関わる機会を増やしました。自分が今まで避けていたのが不思議なぐらいしゃべれました。早くこうしていればよかったな、でも話すの楽しいなと思いました。

私は「障がい者」という言葉に違和感を覚えます。私たちは同じ「人」なのにどうしてそこで分ける言い方をするのか私には理解できません。私はデイにいるおばあちゃん、おじいちゃんたち、そして祖母が大好きです。一度は避けたものの大好きな人たちです。だからこそそばに来た人が顔をゆがめているのを見たり、気持ち悪いと言っているのを聞いたりすると胸が痛くなります。つらい気持ちになります。心の壁を作っているのは私たちの方だと思えます。その壁を壊せるのは自分自身です。私はふれあってはじめて壁が壊れました。きっかけ一つで変わるものです。私たちは同じ「人」です。心はつながっているとします。まずは自分を、そして自分の周りを変えるのが大切だと思います。

中学生になってからは部活動や勉強が忙しくデイに行くことが前よりかなり減りました。でも、デイで過ごす時間がみんなとしゃべる時間が大好きです。



ぼくのおじいちゃん

四年前、ぼくが小学二年生の時でした。ぼくのおじいちゃんは仕事中にたおれ、きゅう急はん送されました。病名は、脳出血でした。集中治りよう室で約三週間ほど治りようし、普通の病棟に移りました。しかし、左手足にまひが残り、今は車いすを使つて生活しています。

毎日リハビリ生活が続きました。言葉の語りよう法と理学の訓練と手足のこわばりを防ぐ治りよう法をしていました。ぼくとお母さんは、毎日おじいちゃんの所へ通いました。最初、おじいちゃんは一人でベットの所で動けず大変でした。ぼくのお母さんは、オムツ交かんをしたり、体をふいたり、車いすをおして病院内の散歩をしたりしていました。ぼくは、それを見て手伝つてみました。

ぼくは、初めは車いすを押すのも大変だなあと思いました。毎日通う内に、ぼくも少しずつ車いすを押すことに慣れてきたのか、上手になっていきました。おじいちゃんも喜んでくれました。

手足が不自由なため、何をすることもぼくとお母さんは、おじいちゃんが困らないように手伝いました。ぼくもお母さんも、毎日おじいちゃんが不自由なく生活できるかなといろいろと考えて助けました。その結果、おじいちゃんも自分でできることが増え、少しずつですが、元気になっていきました。三ヶ月経つて、病院を変わることになり、そこでもリハビリが始まりました。病院によってリハビリのやり方がちがいますが、おじいちゃんがんばつてリハビリを行い、やがて退院になりました。

退院後、家をリフォームし、生活しやすい環境にしました。

おじいちゃんは、今もリハビリに通っています。初めはどうなることかと心配しました。同じ病気でも人それぞれで一人違うのだと気がつきました。おじいちゃんの場合は、話すこともできるのでよかったです。

今後、また病気になるように検査をし、今以上に動けるようになってほしいです。ぼくは、これからも自分でできることを探して手伝つてあげたいです。

詩集が紡ぐホットネットワーク

私が精神障害になったのは、今から二十年ほど前に遡るが、あれから紆余曲折を経ながらも、徐々に人間らしい生活を取り戻すようになったのは、地元で精神障害者福祉施設（ライブサポートセンター）にお世話になり始めた頃である。

約八年前の夏にこの施設を訪問して、「おそろくここが、自分がお世話になる最後の施設になるだろう」と直観的に思った。これまで幾つかの会社や施設を渡り歩いて来たが、この施設が一番、今の自分の身に合っていると思ったからである。

「ここではらくのんびりするか」と開き直った。そして、この施設（以下、ライブ）で、一人の男性利用者と出逢った。

この人は、歳は還暦前後だろうが、恰幅が良く背の高い、平たく言えば、普通の、人の良さそうなおっさん（以下、Aさん）であった。言葉よりも態度で誠意を示すタイプで、誰から見ても善人風の人だった。

詩が趣味で、よくライブ内の壁に作品を展示してもらっていた。こういう詩を読んで、中々味のある詩を書く人だなあ、と内心思っていた。

そんなある日、彼の紹介で、「いっしょに」という名の、絵本詩集を見せてもらい、そこに彼の作品も載っていた。

「いっしょに」は、香川県内で活動するボランティア団体が編纂している詩集で、すべての作品が障害者によるものだった。（障害の類は問わない）

「へえ、中々面白そうだな」と思い、自分も、この詩集に応募してみることにした。ちなみに、Aさんは、この詩集に毎年応募しているようだった。

「詩かー」。これまでの私の人生を振り返ると、サラリーマン時代に朝礼でしゃべった内容が、周囲から「まるで詩人みたい」と言われたことがあったくらいで、自分の経歴にはおよそ縁遠いジャンルだったが、「そんな手間もかからなそうだし、いっちょ、やってみるか」という軽いノリで詩を書き始めた。

その年は、テーマが「私の宝物」というもので、そういう主題で一つ短い詩を書いて応募した。タイトル『マリンプルールの原付バイク』という主題で、提出した。

唯、この詩集は応募すれば誰でも採用される門戸の広い作品集でもあるので、私の詩も、誰かしら絵が入って採用された。誰でも採用されるとは言っても、自分の作品がこうやって絵付きで載るのは嬉しいものである。

毎年、Aさんと詩集の出来について、語り合った。Aさんは、自分の詩を、エッセイ的な詩」と言われたことがある、と言っていた。

高松市

太田 憲作



確かに、Aさんの詩は、どこかエッセイ的であり、私の詩よりも随分と長い詩が多かった。「Aさんの詩はエッセイっぽくて、長くて読み応えがあります」と私が言うと、Aさんは、私の詩について「太田さんののは、横文字（英語）が多くて、それが個人的で際立っていますね。」と穏やかな笑顔で語ってくれた。お互いに誉め合うことで、自己肯定感を強めて、満足した。一見、自己満足のように見えるかも知れないが、そうやって認め合うことで、自信を失っている障害者には、良い薬箱となった。

「いっしょに」の詩集に応募するようになって五、六年が経ち、Aさんは、自分だけの詩集を自費出版で出す、と壮大な夢を語り出した。正確に言えば、Aさんは、若い頃から詩を書きためていたらしく、ストックがかなりあるらしかった。Aさんには、元の奥さんが居て、その人数ある詩の中から秀逸なものだけを選抜してもらっていると言っていた。元奥さんとそうやって、協力して生きていくこと自体、Aさんらしいな、と思ったし、Aさんのたおやかな人柄そのものだと感じた。それと同時に、「流石、本格的だな」とも思った。Aさんの、詩に対する強い思いが伝わってきた。少なくとも、軽い気持ちで詩を書いている私よりかは、詩に対して強い思いで向き合っているな、と思ったが、そうすると、こちらも触発されるといえる。人生の目的も一度は全て失ってしまったが、自分もいつか、自分だけの詩集を出したい、と思うようになった。まだ詩を書き始めて五、六年しか経っていないが、その間、地元『心の健康展』などの展示会に、幾つか詩や絵を提供したりしていたので、自分もストックは、結構ある。私の場合、詩に加えて、それにまつわる挿絵も入れたいと思っている。自分だけの絵本詩集を作成したい。

「まあ、長い目で」。お互いこんな感じだが、Aさんと出逢って、ひよんなことから繋がった詩集を出版する、という夢。過去の呪縛に囚われて、「あいつらより絶対幸せになつてやる」という恨み節にも似た願いはなく、自然な気持ちとしての夢を抱くことが出来た。そのことに関しては、Aさんに感謝しているし、Aさんと出逢わなくてはこういう気持ちも起きなかつたと思う。それから、こういう出逢いの場を積極的に提供して頂き、バックアップしてくれたライブサポートセンターという素晴らしい施設やスタッフの方々にも感謝している。

今は、詩集の実現に向けて、少しずつ詩を書きためている。あと数年先の話になるだろうが、いつか絵本詩集を出版して、またAさんとお互いの詩について語り合いたい。



色物語（しきものがたり）

私とお母さんが一緒に作る作品展があります。名前は「色物語（しきものがたり）」。生きづらさ（障がい）を抱える子ども達。言葉や仕草ではうまく自分を表現するのが苦手な子供達。そんな子供達が、自由に安心して、描いたり、創ったりした作品を発表する作品展です。そこには何の制約もなく、生きづらさを感じている子供たちと、見に来てくださる沢山の方々との自分の作品を通じた交流の場所です。

私には、生まれつき障がいがあります。その為に小さいころから苦手なことがたくさんあります。「何で？」小さい頃には自分でよくわからなかった苦手なこと。泣いていたばかりの私。訳が分からなくなってパニックになってばかりだった私。こんなにも苦しいのに、「助けて。」と言葉で伝えることが難しかった。「すぐに休むよね。ずるいね。いいよね。」友達に言われた言葉です。「昼休みの委員会当番をしないのはずるいよ。」小学校の先生から言われた言葉です。見た目ではわかりにくい私の障がい。無理をして頑張っている周りの人に伝わらなくて、とても苦しかった日々。外の世界に出るのがこんなにも苦しくて怖いことなのに気が付いてくれる人がいませんでした。

私には感覚過敏があります。五感すべてが他の人より強く感じてしまいます。苦手な光や音。その他にも、人から体に触れられたりするのや、鋭すぎる味覚。毎日の生活が刺激だらけで大変です。外の世界に出ると刺激が多すぎてすぐに疲れます。人と話すのも苦手です。気持ちがいかに伝わったり、読みすぎてしんどくなってしまうたり。

そんな私ですが、大好きなことがあります。絵を描くことです。心が落ち着きます。ありのままの自分を表現できます。

描いた絵を見せると、「きれいだね。」と両親はいつも喜んでくれます。それから、たくさんの人に私の描いた絵を見てもうりました。苦しいときに描いた絵。悲しいときに描いた絵。楽しいときに描いた絵。沢山の思いが詰まった絵を通して、たくさんの人と出会うことができました。人と話すのは苦手だけど、描いた絵の質問になら楽しく答えられました。初めての人と話をするのも苦手だけど、絵を通して出会った人とはなぜか不思議と話が弾みました。「あっ！絵を描くことは自分の気持ちを表現する方法だ。苦手なこともマイナスではなく私の大切な個性の一つ」と私は思いました。

私の描いた絵を通して少しずつ広がる世界。そんな時たくさんと同じ苦しみを抱えた友達に出会いました。車のことが大好きで車の絵がとても上手な子。文章を書くのがとても大好きな子。かわい物を作るのが大好きな子。みんなすごい特技、個性を持っています。そんな友達は、様々な障害や病気から生きづらさを抱え、周りから理解されず苦しんでいます。

障がいや病気。目に見えるものばかりではありません。全てを理解するのは難しいかもしれませんが、でも、その人を否定的な面から見るのではなく少し見方を変えてみませんか？人にはたくさん個性があり、得意なこと、苦手なことも、大切な一人の個性として、たくさんの人に気が付いてほしい。「私の色はこんな色。あなたの色はどんな色？」そんな思いが詰まった色物語。そこには、生きづらさを持っている人も、そうでない人もみんなつながる社会があると信じています。

「それぞれの個性で夢を形に。」

「正しく知ることの大切さ」

私の父は通勤かばんにヘルプマークのストラップをつけています。ヘルプマークは赤色の下地に白色のプラスマークとハートがデザインされたものです。そしてこのヘルプマークは、「援助や配慮を必要としている人が、そのことを周囲に知らせることが出来る」マークです。私は父の通勤かばんについているヘルプマークを見るまでヘルプマークを家の外で見ることもしなかったし、その意味も知りませんでした。しかし、ヘルプマークのストラップを利用して私の父も、その存在を知ったのは自分が病気の後遺症で「障害者」になった後のことでした。

私の父は2年半前に突然の脳出血による後遺症で右半身に麻痺が残りました。数か月に及びりハビリに励みましたが、今も右手が不自由な「障害者」となりました。突然の病気で障害者となってしまった父に、最初私は、「かわいそう」という気持ちをもっていました。しかし父は、自分の病気のこと、同じように病気や事故の後遺症で障害を負ってしまった人達のことをインターネットで調べたり、障害者の人達が発信する情報を見たり、聞いたりするようになりました。そんな中で、初めて知ったものの一つが「ヘルプマーク」だったそうです。リハビリのおかげで、電車通勤ができるまで回復した父でしたが、利き手だった右手が不自由になったことで、電車の中で立っているときに、バランスを崩すこともあり、いざというときの偽、と思いヘルプマークのストラップをもらい、通勤かばんに着けるようになりました。ある時私は父に、「ヘルプマークを付けていて、今まで電車で席を譲ってもらったことはあるの?」と質問してみました。すると父は、少し寂しそうな表情で、「残念ながら、ヘルプマークを見て席を譲っ

てもらったことはまだないな」と答えました。その答えを聞いた私は「えーみんな冷たいな」と答えたのですが、すぐに「でも私も、もしそのヘルプマーク見てもそのマークの意味を知らなければ、ぱっと見ただけでは障害者には見えない私の父が目の前に立っていても、席を譲ったりしないかもしれない」と思いました。

ヘルプマークは元々「義足や人口関節を使用している人、内臓障害や難病の方、妊娠初期の方、精神疾患のある方、発達障害のある方」といった「外見からはわかりにくい障害を持つ人が援助や声掛けを必要としていることを示すマーク」として作られています。しかし、ヘルプマークを付けた人の周りにいる人達が、そのマークの意味を知らなければ、マークを付けていても、障害者の方は私の父のように寂しい思いをしてしまいます。

私は、ヘルプマークのような、障害者に関係する様々なマークや、障害者を支援する制度がたくさん作られていることを、父から聞いて知りました。しかし果たして障害者本人やその家族以外で、それらのことを正しく知り、理解している人がどれぐらいいるのだろうか?恐らく、正確に知る人は少ないと思います。しかし、知っていることで、自分たちが役立てることはたくさんあるはずですよ。

誰もが知っていることが当たり前になってほしいし、知っていることで、障害者の方たちに自然に声をかけたり、助け合える社会にしていかななくてはならないと思います。

綾川町立綾川中学校 三年

堀家

実月



妹の生活

妹は生まれつき足が不自由でつまさきで歩いたり走ったりしています。そのため毎日何回も転びます。だけどけがをしなくても泣きません。自分で立ち上がります。ほくはそんな妹が強いなと思いました。

今年の夏休みにおばあちゃんの家近くの山に家族で登りました。妹には無理だと思い行くのをやめるように言いましたが、どうしても登りたいと言ったのでいっしょに登ることにしました。がたがたして、大きな石や木の根っこがあつて土がかんそうしてすべりそうになる歩きにくい道でした。と中休けいしながら妹とお母さんと手をつないで登りました。片道一キロメートルぐらいの道のりをがんばって登りきりました。頂上につくと妹はつかれていたので近くのベンチにすわって持ってきたお茶を飲んでいました。そして周りを見てみるといろいろな物が見えました。おばあちゃんの家や高速道路やほかの山や海まで見えました。妹もかなりつかれたと思うけれどいっしょに来てよかったです。妹もかなりつかれたと山を下りました。ほくは帰りに一回こけたけど妹は一度もこけませんでした。すごいなと思いました。そのほかにもすごいと思ったことがあります。家で妹となわとびをしていたとき妹はなかなかとべませんでした。と中あきらめそうになつたけれどがんばって練習し続けて前とびが約十回、後ろとびが約二十回もとべていました。ほくは後ろとびが苦手でなかなかとべないので妹はすごいなと思いました。

妹は今足に注射をしています。両足に約十五カ所も注射をしているのにあまり泣きません。妹に痛いか聞いてみると、少し痛いと言っていました。十五カ所に注射をして泣かないのはすごいと思いました。

ほくはそんな妹が強いと思います。そんな妹を支えていきたいと思っています。

三木町立氷上小学校 六年

前田まえだ

京佑きょうすけ



耳に障害のある人とのふれ合い

ぼくは、学校の総合的な学習の時間に、耳に障害のある方と手話の勉強をしました。ぼくは、手話をしたことは一度もありませんでした。けれども、初めてしてとても楽しかったです。

人間は、言葉などで思いを伝えたり、考えを伝えたりしますが、耳が聞こえない障害がある人は、相手に手話で話します。しかし、聞き手側も手話が分からないと何が言いたいのかわからないのか、何を伝えたいのかわかりません。だから、聞き手側も手話を覚えなければいけません。ぼくは、この学習で障害のある人は、大変だということを知りました。

そして、最後の質問タイムには、いろいろな手話を教えてもらいました。たとえば、本だったら手を合わせて開くという動作で表すことができます。このように、手話は覚えればだれでもすることができず。他の手話も習いました。パソコンとピアノの手話はよく似ていますが、パソコンは指でボタンを押すようにしてから指を動かします。だから、区別が難しいです。手話には、簡単なものも難しいものもあるということがわかりました。

ぼくは、耳に障害がある人が困っていたら手話が分かる人を探したり、紙に文字を書いたりして助け、コミュニケーションを取りたいです。

さぬき市立長尾小学校 五年

前田まえだ

徠輝らいき



心の輪を広げる体験作文・障害者週間のポスター

2 0 2 2

優秀作品集

香川県 健康福祉部 障害福祉課

〒760-8570 香川県高松市番町四丁目1番10号

